【論　説】

掘り起こされた「愛国華僑」の記憶

忘れ去られた「反英分子」が地元の英雄となるまで

渡辺洋介

はじめに

マレーシアの歴史上、南洋華僑回国機工（東南アジア華僑帰国運転手兼修理工。以下「南僑機工」とする）ほど歴史に翻弄された庶民の「英雄」はいないかもしれない。南僑機工とは、日中戦争中の 1939 年 2 月から 1942 年 4 月まで主にマレーシアとシンガポールから派遣されたトラック運転手兼修理工のことである。シンガポールの抗日運動のリーダー陳嘉庚（Tan Kah Kee）の呼びかけに応じて、彼らはヤンゴンの港で陸揚げされた英米軍の軍事物資を援蒋ルートを通じて重慶に運び、日本軍に抵抗を続ける国民党政府を支援する重要な役割を担った。今となってはその真偽は確かめようもないが、南僑機工による補給がなければ重慶政府は 3 か月で日本軍の手に落ちたであろうとも言われている。

このように歴史的にも無視できない重要な役割を果たし、南洋の故郷を離れるときには地元の華僑社会から盛大に送り出された南僑機工であったが、中国の共産化（1949 年）とマラヤの非常事態（1948～1960 年）により彼らの運命は一変した。中国から復員した南僑機工はマラヤ共産党や抗日軍とのつながりを疑われ、また、彼らの愛国精神が反英独立闘争に転化することを恐れたイギリス植民地政府は復員した機工を監視しつづけた。1957 年にマラヤは独立し、1963 年にマレーシアとなったが、1989 年にマラヤ共産党との和平協定が結ばれるまで、クアラルンプール政府はイギリスの反共政策を継続した。そうした中で多くの南僑機工は自らの身の安全を守るため、自身が南僑機工であることを隠しつづけた。新聞記者は取材をしたがらず、作家も彼らのエピソードについて書くことを避けた。機工の家族も多くを語らなかった。さらに南僑機工の歴史は中国の歴史でありマレーシアの歴史ではないと考えられていたこともあり、人々の記憶から徐々に忘れ去られていった（劉, 2015: 145-147）。

ところが、21 世紀に入ってマレーシアとシンガポールの華人社会は忘れ去られた英雄たちの記憶を取り戻し始めた。各地で南僑機工の歴史が掘り起こされ、2011 年にはペナンで南僑機工を追悼する彫像が完成し、2013 年にはシンガポールとジョホール州クライで追悼碑と彫像が建てられ、2014 年にはペナンで南僑機工紀念館がオープンした。なぜ

近年になって南橋機工の歴史が掘り起こされるようになったのだろうか。また、こうした現象は集団的記憶の理論の中にどう位置づければいいのだろうか。以下においてこれらの疑問に答えていきたいが、まずは、集団的記憶の理論に論を進めたい。

I　集団的記憶の理論－３つの立場

集団的記憶という概念を最初に提唱したと言われるのは戦前の社会学者モーリス・アルヴァックス（Maurice Halbwachs）である。その後の議論の展開は彼の主張を出発点としている。アルヴァックスによると、集団的記憶とは利益や願望といった現在の目的のために形成された社会的構築物のことで（Halbwachs, 1992: 29）、支配的／公的記憶には権力者の利益や欲望がより強く反映されるという。この主張は、過去の集団的記憶が現在の諸事情によって形成される点を強調することから、「現在主義アプローチ」（presentist approach）と呼ばれている。社会学者ではないが、エリック・ホブスボーム（Eric Hobsbawm）らの「伝統の発明」（invention of tradition）論も基本的にはこの考え方に立っていると見ていいだろう（Mizstal, 2003: 7）。

しかし、この主張は以下の 3 つの点で他の 2 つの立場から批判されている。第一に、バリー・シュワルツ（Barry Schwartz）やマイケル・シュドソン（Michael Schudson）らは、現在の関心のみによって過去の記憶が形成されると主張する点を批判する。彼らは、歴史的継続性を無視して過去を解釈することは不可能で、集団的記憶は現在だけでなく過去からの継続という側面も有していると力説する（Schwartz, Zerubavel and Bartlett, 1982）。つまり、現在の事情からのみ過去を都合よく解釈することはできないということである。この立場をバーバラ・ミズタル（Barbara Mizstal）は「記憶のダイナミクスアプローチ」（the dynamic of memory approach）と名づけている（Mizstal, 2003: 67-74）。

第二に、現在主義アプローチは集団的記憶が権力者らによって上から形成される点を強調し、労働者、女性、少数者らの声なき声によって築かれる対抗的記憶（counter-memory）の存在を見落としていると批判される。この議論は民衆の記憶グループ（Popular Memory Group）によって展開されたため、「民衆の記憶アプローチ」（popular memory approach）と呼ばれている（Popular Memory Group 1982, Mizstal, 2003: 61）。

第三に、支配的／公的記憶と対抗的記憶の関係についてだが、民衆の記憶アプローチは両者の関係を対抗的と捉えるのに対し、記憶のダイナミクスアプローチは両者は交渉可能で対抗的記憶の一部が支配的／公的記憶に含まれることもありうると考える（Mizstal, 2003: 67）。

以上、集団的記憶の理論における 3 つの立場を概観してきた。こうした議論を念頭において、マレーシアとシンガポールの華人社会における南僑機工の忘却と記憶回復の歴史を分析していきたい。

II　忘れ去られた英雄たち

戦争が終わり、東南アジアから援蒋ルートに派遣された南僑機工約 3,000 人のうち約 1,000 人は 1946 年から 47 年にかけて東南アジアの故郷へ復員した（約 1,000 人は戦争中に犠牲となり、約 1,000 人は中国に残った）。機工を乗せた船がシンガポールに到着する際には、「中華民族の光」「勝利栄光の帰還」など機工を称える中国の民衆から贈られた旗が船上に掲げられていたという。シンガポールで下船しマレーシア各地に帰郷した機工はそれぞれの地で歓迎を受け、英雄として迎えられた（何, 2006: 79-87）。復員した機工には、彼らの戦勝への貢献に対して駐シンガポール中国領事館から 300 米ドルと 150 シンガポールドルが与えられた（荘, 1999: 12）。米ドルで支払われたのは、実際にはアメリカが中国を通じて資金を提供していたからである（郭, 2014）。1947 年にはクアラルンプールに南僑機工の追悼碑が建てられ、1951 年にはペナンにも建てられた。ペナンの追悼碑は第一次大戦の停戦記念日にあたる 11 月 11 日に除幕式が行われ、以後今日に至るまで毎年その日に追悼式典が行われている（荘, 2015）。一方、クアラルンプールの南僑機工追悼碑ではマラヤ第二次大戦歴史研究会（馬来亜二戦歴史研究会）が 1995 年に始めるまで定期的な追悼式典は行われてこなかった。

また、1950 年代のシンガポールでも機工の追悼碑を建てる話が持ち上がった。しかし、共産中国の誕生により、復員した機工が国民党支持と共産党支持に分裂し、両者の間で深刻な対立が生じた。そのため、シンガポールでの追悼碑建設計画は実を結ばなかった（郭, 2014）。

このころイギリス植民地政府はマラヤに非常事態（Emergency）を宣言し、マラヤ共産党党員、元抗日軍兵士、マレー民族主義者、労働組合幹部、進歩的教師など「反英分子」「共産主義者」と目される者を次々と逮捕した。華人は警戒の対象で、中には「新村」と呼ばれる有刺鉄線で囲まれた土地に移住させられ、朝 6 時から夜 6 時まではゴム園などで働かされ、夜間の外出を禁止された者もいた（劉, 2015: 146-147）。また、イギリス植民地政府は中国から南僑機工がマラヤとシンガポールに入国することを禁止した。にもかかわらず、中には自分が南僑機工であることを隠して帰国した者も存在した（郭, 2014）。そうした中で、南僑機工は自身の過去を隠し、新聞記者や研究者も機工のことには触れなくなった。こうして南僑機工の歴史は人々の記憶から忘れ去られていった（劉, 2015: 146-147）。

一方、中国に残された約 1000 人の南僑機工の運命はさらに悲惨なものであった。国共内戦で国民党が敗れ、同党を支援した過去をもつ南僑機工は「国民党の手先」と呼ばれ共産党政府から敵視された。1966 年から始まった文化大革命では、資本主義社会とのつながりを持つ華僑はブルジョア階級とみなされ、南洋出身の機工とその家族も「反革命分子」として打倒の対象となった。ある機工は反革命分子であることを示す帽子をかぶらされ街で見世物にされ、殴る蹴るの暴行を受けたり、髪を引っ張られたりしたという（林, 2000: 97）。中国においては、機工の抗日活動は人々に記憶されなかったばかりか、国民党を支

持したブルジョア階級として激しい迫害に遭ったのであった。

Ⅲ　「反革命分子」から「愛国華僑」へ

南僑機工を取り巻く悲惨な状況は 1976 年に文化大革命が終わり、鄧小平が政権に復帰したころから改善に向かった。1978 年に開かれた中国共産党第 11 期中央委員会第 3 回全体会議（三中全会）は、文化大革命中に起きたさまざまな出来事の誤りを指摘し、不当な理由で批判された人々の名誉回復を行うことを宣言した。また、台湾、香港、マカオなどに住む在外華人に対して中国の経済発展と中国との統一に協力するよう呼びかけた（人民網, 1978）。鄧小平は「華僑と地主、富豪、反動派、悪人を並列するという、こうした間違った政策は必ず正さなければならない」（鍾, 2000: S3）と述べ、これに沿って南僑機工の名誉回復も行われた。

そうした中で、陳嘉庚の甥にあたる陳共存（Tan Keong Choon）シンガポール中華総商会会長は 1986 年に調査団を組織して中国雲南省の援蒋ルートを視察した。調査団はそこに住む 50 名ほどの南僑機工を訪問し、聞き取り調査を行った。彼らは異口同音に戦後の迫害と苦難を訴え、中には「陳嘉庚が南僑機工の募集を呼びかけなければ、その後の何十年にもわたる苦難はなかったのに」と文句を口にする者さえいたという（陳, 1999: 13-17）。

この訪中の最後に陳共存は昆明で普朝柱中国共産党雲南省委員会書記と会見することができた。会談の中で、陳は南僑機工の追悼碑建立を提案するとともに、建設費として一万元の寄付を申し出た。これに対して普は「いいだろう、記念碑を作ろう！記念碑を建設すれば若い世代の教育に大きな影響力がある。政府による記念碑の建立はぜひ必要だ」と返答した。こうして昆明における南僑機工追悼碑の建設計画が始まったのだ（劉, 1999: 43, 何, 2006: 95-97, 呉, 1999: 30, 呉, 2006: 109, 楊, 2005: 151-152, 楊, 2010: 148-149）。

記念碑は 3 年後の 1989 年 7 月 7 日、南僑機工の任務開始 50 周年の年に落成した。除幕式の挨拶で普はつぎのように述べ、南僑機工の功績を高く評価した。

> 今日、我々がこの記念碑を建立したのは、南僑機工のこの偉大な愛国心に満ちた歴史上の功績を表彰称揚し、南僑機工に崇高な敬意を表す必要があるからだ！また、国のために犠牲となった南僑機工を偲び、我々の哀悼の意を示したい！我々はまた南僑機工のこの輝かしい歴史によって、国内外の中国人を教育、発奮させ、愛国主義の旗を高く掲げ、中華民族の振興のため、祖国の繁栄、富強、統一のため、共に努力奮闘しなければならない！（普, 2000: 111-112）

昆明の南僑機工追悼碑

ここに至って「国民党の手先」「反革命分子」として迫害された南僑機工は「愛国華僑」と称賛されることとなった。その背景には約一か月前に起きた天安門事件があった。1989年6月4日を境に中国政府は反政府運動の中心となった若者を再教育する必要性を認識した。その手段のひとつが愛国主義教育だった。その後、中国政府は1994年に愛国主義教育綱領を制定し、数多くの愛国主義教育基地を選定した。昆明の南僑機工記念碑も 2001年にそのひとつに選定され、南僑機工を「愛国華僑」とする公的な評価は不動のものとなった。

このように南僑機工は「反革命分子」から「愛国華僑」となったのだが、こうした中国の状況に対しては、現在主義アプローチにより説明力があるように思われる。一般民衆の南僑機工に対する評価はほとんど権力者の考えの反映でしかなく、権力者の現在の利益によって民衆の集団的認識が形作られてきたのである。文革中は南僑機工が自らの対抗的記憶を公の場で表明することは許されず、そうした声が支配的記憶に包摂されることはあり得なかった。文革が終了し、南僑機工の名誉が回復され、鄧小平が海外華人との関係を中国の経済発展に利用しようとすることになって初めて、華僑である南僑機工は肯定的に評価されるようになった。また、1990 年代に入って江沢民が愛国主義教育を強化すると、南僑機工は愛国者として高い評価を受けることになった。現在、南僑機工に関する出版物やDVDは数多いが、いずれも彼らを愛国者として描いている。彼らを国民党の手先とか、反革命分子として描いている作品は見たことがない。

このように南僑機工を肯定的に見る社会的雰囲気の下で、彼らの記念碑が次々と建てられた。雲南省では1990年に芒市、1995年に保定、2005年に畹町で南僑機工の記念碑が建てられ、2013 年には海南省海口で南僑機工を記念する彫像が設置された。こうした空気の中、雲南省に残された機工とその家族が故郷のマレーシアを訪ね、数十年間離れ離れになっていた親族を探そうという動きが出てきた。その初めての試みが行われたのは1995年のことであった。

Ⅳ　掘り起こされた記憶

１．数十年ぶりの里帰り

すでに述べたように、マレーシアに戻った南僑機工は政治的事情から多くを語らず、1990年代には彼らはほとんど忘れ去られた存在となっていた。そうした中で1995年10月に雲南省の南僑機工17人が数十年ぶりにマレーシアに里帰りし、14日間の日程でクアラルンプール、イポー、ペナン、セレンバン、マラッカ、ジョホール・バルなどを訪れた。同時に福建省アモイの華僑博物院副館長・陳毅明ら４人も同行し、南僑機工の展示会や講演を行った（劉, 1999: 49-50, 鍾, 2000: 134-157, 呉, 2006: 125-126）。

こうした様子はメディアでも報道され、かつての「英雄たち」に光が当てられるようになった。例えば、彼らに同行したシンガポールのフリージャーナリスト柯冰蓉（Kwa Peng Yong）は 9 人の機工の横顔を紹介した数本の記事を 1996 年 9 月 7 日から 14 日までシンガポールの『聯合早報』に寄稿した（柯, 1999: 182-194）[1]。他にも『聯合早報』には韓山元（Han Tan Juan）や区如柏（Au Yue Pak）が、マレーシアの『南洋商報』には呉志超が南僑機工についての記事を寄稿した（劉, 1999: 49, 郭, 2014）。この時期に南僑機工のことが比較的多く報道されたことから、1995 年がマレーシア、シンガポールにおける南僑機工研究の出発点となったとマレーシアの機工研究の先駆者である劉道南（Low Tow Nam）は述べている（劉, 2015: 149）。

一方、サラワク州では 1997 年 11 月に地元の華字新聞『国際時報』に同州出身の機工・張天賜（Teo Tian Shu）の生涯についての記事が掲載され、読者から大きな反響があった。それを契機に他の 4 人のサラワク出身の機工にもインタビューが行われた。その後、インタビュー記事をまとめて一冊の本にしてほしいという要望が読者から届いたのを契機に、インタビューを行った林韶華（Lim Shau Hua）と房漢佳（Fong Hon Kah）が本にまとめ、『英雄の物語』というタイトルで 1998 年に第一版を出版した[2]（Lim & Fong, 2016: 5）。

2000 年には『南僑機工には歌い終わらない悲しい歌がある』が出版された。同書は 1989 年の昆明記念碑の建立から 1999 年に同地で盛大に行われた南僑機工任務開始 60 周年記念式典に至るまでの追悼活動の記録である。編者兼著者の鍾錫金がマレーシア人であるためか、紙幅の多くはマレーシアと中国の機工の交流に割かれている。その中でも特に多くを占めているのがマレーシアから 99 人という大集団で参加した 1999 年の 60 周年記念イベントである（鍾, 2000: 29-89）。陳凱希（Tan Khai Hee）マレーシア中国友好協会事務局長が団長を務め、彼に率いられた訪問団は昆明の記念碑前での追悼式典に参加し、機工に関する講演を聞き、機工にちなんだ歌や踊りを披露するパフォーマンスを楽しんだ（何, 2006: 5, 99-100）。このようにマレーシアと中国の間では、この時期に機工関係者と南僑機工に関心をもつジャーナリストや研究者の交流が活発化し、南洋の知識人の間では機工のことがだいぶ知れ渡るようになってきた。それがその後のマレーシア、シンガポールにおける南僑機工の記念碑・彫像の建設ラッシュの基礎となったのだ。

２．掘り起こしの始まり

劉道南によると、陳毅明華僑博物院副館長が 2007 年にマレーシア各地を訪問したのが、

---

1 この記事はのちに南僑機工の家族でつくる親睦会が発行した『南僑風』という本に全文が掲載された。

2 第一版は 1998 年に、改訂版は 2013 年に英中二か国語で出版された。出典は 2013 年発行の英語版によった。

マレーシアおける機工の歴史の掘り起こしが始まる契機となった。それ以前は、マレーシアでは体系的な南僑機工の調査を、例えば、機工の生き残りからの聞き取りやその家族の調査を行ってこなかった。その後、劉はしばしば新聞に記事を寄稿して、南僑機工とその家族を探した。その結果、数十軒の機工の家族と連絡をとることができた。機工の子孫の家庭を訪問して聞き取りをし、機工の写真や資料を収集整理し、講演や展示会を行った。こうした活動が新聞などで報道されることによって、さらに機工の子孫に関する情報や機工の資料が劉に寄せられるようになった（劉, 2015: 149-151）。

同じころシンガポールでも南僑機工の歴史の掘り起こしが始まった。その契機となったのは、先賢館というシンガポールの先賢（パイオニアの意）を紹介する展示室のオープンであった。2008 年のことであった。この構想は陳嘉庚の甥にあたる陳共存が発案し、陳嘉庚のオフィスとして使われた怡和軒の一階に小さな展示室が作られた（鄒, 2013: 228）。展示室には陳嘉庚、陳六使（Tan Lark Sye）、林義順（Lim Nee Soon）といった偉人のほかに、市井のトラック運転手にすぎない南僑機工が展示されることとなった（先賢館パンフレット）。この展示室の作成にあたって、かつて南僑機工を取材した経験のある元聯合早報記者・韓山元が館長に任命され、フリーランスライターの鄒璐（Zou Lu）がアシスタントとなった。開館後、一般民衆からの反響は大きかった。多くの学校や市民団体から声がかかり、韓と鄒は南僑機工の講演で引っ張りだことなった。1990 年代にはなかった予期せぬ現象であった（鄒, 2013: 228）。

2009 年には、シンガポール国立公文書館（National Archives of Singapore）、中国国立公文書館（中国国家档案館）、雲南省公文書局（雲南省档案局）が協力し、「南僑機工帰国抗戦史料展示会」（南洋華僑機工回国抗戦史料図片展）と題する巡回展示会を各地で行った。展示会は同年 8 月の昆明に始まり、9 月には北京、10 月にはシンガポール、12 月には海南、2010 年 8 月にはクアラルンプールで実施された。シンガポールでの展示会は中華総商会で行われたが、ここでは中国から送られて来た展示物の他にシンガポール出身の機工のインタビューが加えられ、南僑機工に対するシンガポールからの視点が補足された（National Archives of Singapore 2010: v, 鄒, 2013: 228）。この展示会で使われた展示物は、のちにシンガポール国立公文書館が本にまとめて出版することになるが、それを見るとなぜシンガポール政府が南僑機工の展示会を支援したか、その理由を垣間見ることができる。

> 厳しい戦争という状況を経験した南僑機工が示した自己犠牲、勇気、忍耐といった模範的な価値は、すべての世代を鼓舞しつづけるだろう。彼らの祖先の母国ではあるが、国に忠誠を尽くし、根を下ろした彼らが示した良識は、間違いなく見習う価値がある（National Archives of Singapore, 2010: 106）。

つまり、自己犠牲や国への忠誠心といった価値観を国民に植え付けることが展示会の目

的のひとつだったのである。

このころアモイの華僑博物院副館長・陳毅明らは南僑機工のドキュメンタリーを作成すべくマレーシアを何度も訪問していた。彼女たちは2009年からマレー半島とサラワク州に住む今も健在の機工を訪ね歩き、聞き取り調査を実施すると同時に機工の姿を映像に収めた。彼女たちは 2010 年にもマレーシアを訪問してドキュメンタリーの撮影をつづけ、また、機工に関する多くの歴史的資料（証書、手紙、写真、賞状、バッジなど）を収集した（劉, 2015: 153)。

このように、マレーシア、シンガポールでは2007年ころから南僑機工の調査が本格的に始まり、中国の専門家の助けを借りながら、徐々に実態が明らかになってきたのである。

３．援蒋ルート万里行 ― 追悼碑建立の前奏曲

南僑機工の追悼碑と彫像がシンガポールとクライに姿を現すのは2013年だが、その呼び水となる重要なできごとが起きたのが 2011 年だった。「援蒋ルート万里行」（滇緬公路万里行）と呼ばれる大がかりなドライブである。四輪駆動車で車列を組んで、シンガポールから雲南省まで陸路で進み、南僑機工が走った援蒋ルートを実際に走ってみようというのだ。この企画は、クライのジョホール州河婆同郷会が中心となり、クアラルンプールに拠点を置くマラヤ第二次大戦歴史研究会が共催した。万里行の出発点をシンガポールの怡和軒とした関係で、のちに怡和軒と陳嘉庚基金もこの長距離ドライブの企画に加わった（郭, 2014)。

この壮大な企画に参加したのは、シンガポール、マレーシア、中国から集まった 80 人であった。2011 年 6 月 25 日、かつて陳嘉庚が南僑機工の募集を呼びかけた怡和軒の前で出発セレモニーが行われた。セレモニーには万里行参加者 80 人を含む約 300 人が集まり、多くのメディアに取り上げられた（鄒, 2013: 228-229)。一行はまずシンガポール中心部に位置する日本占領時期死難人民紀念碑に向かい、そこで粛清犠牲者に哀悼の意を表した。翌日、クアラルンプールの広東義山の奥に建てられた南僑機工の碑を訪れた。その後、一行はタイ、ラオスを経て雲南省に入り、盧溝橋事件のあった 7 月 7 日には昆明の機工記念碑の前での追悼式典に参加した。そこで待っていたのは、当地に住む今も健在の機工 3 名だった（蔡, 2011: 26-28)。機工本人から直接話を聞くことによって、南僑機工の歴史にさらに興味をもった参加者も少なくなかったであろう。

昆明からは援蒋ルートを辿り、数日間かけてミャンマーとの国境の町・畹町へ向かった。道中、多くのハプニングが起きた。車が故障したり、途中で迷子になったり、集団食中毒にかかったりした。そうしたハプニングを経験し、多くの参加者は、かつて援蒋ルート上でおそらくさらに困難な状況に見舞われたであろう南僑機工の苦労を身に染みて感じることができた（鄒, 2013: 122)。折り返し点の畹町には 7 月 12 日に辿り着いた。そこでは

2005 年に完成した真新しい南僑機工の碑に参拝し、そこからマレーシアへの帰路についた。再びラオス、タイを走り、援蒋ルート万里行の終着点であるペナンには 7 月 30 日に到着した。そこで南僑機工の碑に参拝し、35 日間にわたる旅はここに幕を閉じた（蔡, 2011: 26-27）。

このイベントは、のちのシンガポール、マレーシアにおける機工の追悼活動に大きな影響を与えた。第一に、万里行は中国語メディアで大々的に報道され、南僑機工の歴史の重要性が両国でさらに広く認識されることとなった（劉, 2015: 154, 鄒, 2013: 120）。第二に、南僑機工の追悼活動に関わる多くの重要人物がこのドライブに参加していた。マレーシアで機工の調査を始めた劉道南のほか、のちにクライの追悼碑建立の中心人物となった黄福庭（Wong Fook Tien）、シンガポールでの南僑機工の彫像設置に尽力した郭文龍（Kek Boon Leong）と鄒璐が、万里行に参加するか企画に関わっていた。援蒋ルート万里行に参加することによって得られた心を揺さぶるような体験が、その後の追悼活動のモーメンタムを作っていった面があることは否定できない。

４．クライの追悼碑

「南僑機工の追悼碑をクライに建てようではないか」。こう言い出したのは、2011 年 7 月 7 日に万里行参加者とともに昆明で追悼式典に参加したジョホール州河婆同郷会会長・黄福庭であった（黄, 2014）。黄は昆明訪問の際、機工本人から話を聞き、クライ出身の機工・徐新準の息子である徐宏基、ジョホール州ムアル出身の機工・張智源の息子である張雲鵬と知り合った（『南洋商報』2011 年 11 月 16 日, 徐, 2010: 380, 張, 2010: 397）。そこで機工およびその家族と個人的に交流したことが、黄に強い印象を残したようだ。彼らとの交流を通じて、南僑機工の歴史的重要性を初めて認識したという。もし南僑機工が 45 万トンに及ぶ英米軍からの軍事物資を輸送しなければ、中国は日本軍の攻撃に持ちこたえられず、滅びていたかもしれないと黄は認識したのであった（黄, 2014）。

こうした認識のもと、黄は 2012 年 5 月に追悼碑建設に向けて動き出した。この時期に動き出した理由は、前年に交流を深めた雲南省の機工関係者がその年の 8 月にクライを訪問する予定になっていたことと関係がある。クライ河婆同郷会会長である黄は、徐宏基や張雲鵬が父親の故郷を訪ねにジョホール州へ来た際に彼らを案内する組織の責任者であった。黄は前年にお世話になった機工の子孫たちに何か良いプレゼントができないものかと考えを巡らせたが、なかなか良いアイデアが出てこなかった。そうした中で、ふと思いついたのが、南僑機工の記念碑をクライに建立す

黄福庭

ることだったのである（黄, 2014）。

黄は早速クライ地区にある 28 の華人団体と地元に住む南僑機工の子孫を呼び寄せ、クライに南僑機工の追悼碑を建立する計画について相談した。すると、彼らは即座に記念碑の意義を理解し、黄の計画に同意した。以後、彼はクライ華人団体南僑機工史実調査委員会（古来華団探緬南僑機工史実籌委会）主席団主席として追悼碑建設に奔走した（黄, 2014）。

まず、確保しなければならなかったのは追悼碑を建てる場所だった。幸いにもクライ中心部から約 5km の地点に富貴山荘という華人墓地があり、そこに南僑機工の碑を建てるのがいいのではないかと考えた。そう考えた黄は富貴山荘理事長・胡亜橋（Fu Ah Kiow）をクアラルンプールに訪ねた。彼に会うのはこの時が初めてだったが、胡は即座に黄の要請を受け入れてくれた（黄, 2014）。

つぎに必要なのは建設資金だ。マレー人中心のマレーシアで、政府が華人の追悼碑建設のためのコストを負担してくれることはあまり期待できない。そうした中で建設費はすべて民間の寄付によった。多くの寄付を寄せてくれたのは、やはり機工関係者であった。完成した記念碑の横に建てられた寄付者一覧によると、多額の寄付をしたトップ 3 は陳嘉庚の曾孫と機工の子孫であった。

追悼碑建設に動き始めてから約 3 か月後の 2012 年 8 月 13 日、富貴山荘の南僑機工記念碑建設予定地で鍬入れ式が行われた。式典には雲南省から訪れた機工関係者の訪問団 40 名が出席した。その団長を徐が、事務局長を張が務めていた（古来華団探緬南僑機工史実籌委会, 2012: 7）。その後、追悼碑の建設は順調に進み、約 1 年で完成。2013 年 8 月 12 日に関係者を招待して除幕式が行われた。中国からは再び張が出席した。黄、胡といった追悼碑建立に携わった人物もこの歴史的瞬間を目撃した（『南洋商報』2013 年 8 月 13 日）。

こうして追悼碑は完成した。計画を主導した黄の回顧によると、追悼碑の建設は非常にスムーズに進み、大きな困難には直面しなかったという。その理由を聞いてみると、マレーシア華人の間では戦争の記憶を後世に伝えることの意義が広く共有されており、追悼碑建設の重要性がすぐに理解されたからでなはいかと答えていた（黄, 2014）。

クライの南僑機工追悼碑

５．シンガポールの彫像

クライで追悼碑建立の計画が進められていたその時、シンガポールでも同じような計画が進められていた。その計画を主導した郭文龍によると、ターニングポイントとなったのは、随筆南洋文化協会が 2012 年 2 月 12 日に主催したシンガポール陥落 70 周年記念講演会での、ある

できごとであった。郭は講演会の最後に約500人の聴衆に対して「南僑機工の記念碑をシンガポールにも建てようと思うが、賛同する方は手を挙げてください」と聞いてみた。すると、驚いたことにほとんど全員が手を挙げたのだ（郭, 2014, 鄒, 2013: 229)。その様子は『聯合早報』が翌日の朝刊（2012年2月13日）で報道し、さらに2月14日の社説で郭の提案に対する政府の支持を呼びかけたのだ。その後2週間にわたり、『聯合早報』には数多くの追悼碑建設支持の声が寄稿・掲載された（例えば、郭, 2012, 葉, 2012, 林, 2012, 瀋, 2012, 厳, 2012, 鄒, 2012)。

これを見て国民の追悼碑建設に対する広範な支持を感じたのか、タンピネス集団代表選挙区（GRC）選出の国会議員・馬炎慶（Baey Yam Keng）が3月2日に国会でこの問題を取り上げた。馬は政府に対して「民間で南僑機工の追悼碑建設の動きがあるが、政府はこれに対してどのような立場なのか」と問いただしたところ、傅海燕（Fu Hai Yien）情報通信芸術省上級国務相（Senior Minister of State）は「もし中華総商会が主導的役割を果たすのであれな、政府はこの動きを支持する」と答弁した（『聯合早報』2012年3月3日)。

これを機に追悼碑建設の動きが一気に加速した。その後、中華総商会が中心となり南僑機工紀念碑建立委員会を設立した。委員会は4つの組織から構成され、中華総商会からは郭と呉学光（Wu Hsioh Kwang）が、怡和軒からは林清如（Lim Chin Joo）が、陳嘉庚基金からは潘国駒（Phua Kok Khoo）が、シンガポール宗郷会館聯合総会からは方百成（Perng Peck Seng）が委員として送られた（郭, 2014)。

委員会ではまず記念碑を設置する場所をどこにするかが議論された。議論の結果、場所は晩晴園（孫中山南洋紀念館）とすることで落ち着いた。その理由は、第一に、晩晴園は中華総商会の所有であり、かつ記念碑を設置するのに十分なスペースがあるからであった。第二に、南僑機工と孫文の歴史的功績には、両者とも国内外の華人と協力して中国に貢献したという共通点があり、孫文記念館の横に南僑機工の碑があっても不自然ではないという結論となった。また、設置するのは記念碑ではなく南僑機工の彫像が望ましいということとなった。委員会でそうした結論に至った後、彼らは晩晴園を所有する中華総商会とその敷地内にある孫文記念館を運営する国家文物局（National Heritage Board）と連絡をとり、晩晴園敷地内に機工の彫像を設置する許可を得た（郭, 2014)。

彫像の除幕式

シンガポールの南僑機工の彫像

つぎに議論されたのは建設費用についてであった。費用の総額は16万シンガポールドルと見積

もられた。最終的には委員会を構成する 4 つの団体がそれぞれ 4 万ドルずつ負担し、シンガポール政府には費用の負担を求めないこととなった。こうした過程を経て、馬議員が国会で質問をしてから約 1 年後の 2013 年 3 月 4 日、晩晴園の片隅で南僑機工の彫像が除幕された。除幕式には多くの関係者が集い、盛大なセレモニーがとり行われた（郭, 2014）。

こうして 2013 年にクライとシンガポールで南僑機工を記念する彫像と碑が新たに作られたのだが、両者の特徴は政府がほとんど関わっていないことにある。マレーシア、シンガポール両政府は、南僑機工の追悼碑／彫像建設に関してはまったく費用負担をせず、土地提供などの便宜供与も行わなかった。民間主導で下からのイニシアティブによって世論や関係者の支持と了承を得、追悼碑建設に漕ぎつけたのだ。こうしたことから、中国のケースと異なり、この 2 つのケースを現在の利益と権力者によるトップダウンを強調する現在主義アプローチによって説明することは難しい。現在主義アプローチは、「我々の過去の理解は現在の問題を解決するために我々が用いる心のイメージによって影響される」（Halbwachs, 1992: 34）ことを説くが、クライとシンガポールの追悼碑建設を主導した黄と郭の話からは、彼らが現在抱える何らかの問題を解決する手段として追悼碑建設を推進したようには思えなかった。郭は機工の彫像を建立した理由として「戦争に反対することは平和愛好者の共通の責任だ」（郭, 2014）と答え、黄もまた平和の大切さと戦争反対というメッセージを世に送ることが追悼碑建設の目的のひとつだと述べている（黄, 2014）。黄に関しては、中国からクライを訪れる機工関係者へのプレゼントとして碑を建立したという側面もあり、現在の問題とのかかわりが無いわけではない。しかし、愛国者・南僑機工という中国発の言説の影響はあるかもしれないが、現在の利益や願望を実現するためにご都合主義で南僑機工の歴史を歪曲したとはいえないし、それが必要な状況だったとも思えない。インタビューをした追悼碑建設を推進した人々は、筆者の見たところ、そもそも緊急の解決を要する現在の問題を持ち合わせていなかった。両プロジェクトを推進したのは政治家ではなく、純粋に歴史に関心をもつ一般市民である。もし政府が南僑機工の追悼活動に関わっていれば、何らかの政治経済的考慮が働いたかもしれないが、上の 2 つのケースでは政府はほとんど関わっていない。ミズタルが示唆するように、追悼活動は常に上から押し付けられるわけではなく、必ずしも力関係の維持という政治的目的のみに還元されるとは限らないのである（Misztal, 2003: 61）。

おわりに

これまで忘れ去られた存在だった南僑機工はなぜ近年になってマレーシアとシンガポールで盛んに追悼されるようになったのだろうか。その背景には、第一に、政治環境の変化があった。マレーシアとシンガポールに復員した南僑機工が自らの経歴について公の場で語ってこなかったのは、もしそうすれば「反英分子」「共産主義者」などとレッテルを

貼られ、最悪の場合、逮捕される恐れがあったからである。しかし、そうした状況はマラヤ共産党との和平協定の締結（1989 年）と東西冷戦の終結（1991 年）によって大きく変容した。南僑機工が自らの経歴を語っても、政治的に問題とならない状況となっていたのだ。1995 年になって雲南省の機工がマレーシアを訪問できるようになったのも、中国国内の政治状況とともに、マレーシアの政治状況が、南僑機工にとってすでに問題のない状況となっていたことの証である。

第二に、近年になって機工の追悼活動が盛んになったのは、1990 年代後半に始まった高度成長により中国が豊かになり、中国に住む機工関係者とマレーシア、シンガポールの華人社会との交流が飛躍的に増大したことが大きな要因といえる。マレーシアやシンガポールで南僑機工に興味を持ち、研究・追悼活動を始めた中心人物、例えば、劉道南、黄福庭、鄒璐などは皆、雲南省の援蒋ルートに自ら赴いたり、今も健在の機工やその家族から話を聞くことを通じて、南僑機工への理解を深め、自ら南僑機工の DVD 上映会を開いたり、講演会を主催し、ひいては、追悼碑や彫像を建立するに至ったのである。その過程において、中国の機工関係者との交流が果たした役割は大きい。

最後に、こうした現象を集団的記憶の理論との関係でどう理解すればいいのかという点について論じたい。すでに述べたように、中国社会における南僑機工に対する迫害と称賛を説明する理論としては、現在主義アプローチにより説明力があるように思われる。しかし、クライとシンガポールの追悼碑建設をめぐる状況は、現在主義アプローチではうまく説明できない。これらのケースから言えることは、中国とは異なり、近年のマレーシアやシンガポールにおいて政府主導でなく下から集団的記憶を構築することは不可能ではないということである。問題は、下から作られた、あるグループの記憶や認識が支配的／公的記憶になったり、そこに包摂されたりすることがあるかどうかという点だが、この点については実証研究の成果が待たれる。また、今回の研究を通じて気づいたのだが、集団的記憶の理論は集団的記憶が国内で形成されることを前提としており、国境を越えた人的交流といった要素が記憶の形成に及ぼす影響については、ほとんど考慮されていない。南僑機工の記憶の掘り起こしは、マレーシア、シンガポールの華人社会と中国の機工関係者の人的交流によってもたらされたわけで、こうした現象を説明する理論的枠組の構築が今後の課題といえる。

〈資料・参考文献〉

英語文献

Hobsbawm, Eric and T. Ranger (eds.) (1983) *Invention of Tradition*, New York: Cambridge University Press.

Halbwachs, Maurice (1992) *On Collective Memory*, Chicago: Chicago University Press.

Lim, Shau Hua Julitta and Fong Hon Kah (2013) *The Intrepid Sarawak Volunteer Mechanics 1937-1945*, Kuching: ASCAR Publication.

Misztal, Barbara (2003) *Theories of Social Remembering*, Maidenhead: Open University Press.

National Archives of Singapore (Ed.) (2010) *Nanqiao Jigong: the extraordinary story of Nanyang drivers and mechanics who returned to China during the Sino-Japanese war*, Singapore: National Archives of Singapore.

Popular Memory Group (1982) Popular Memory: Theory, Politics, Method, In Richard Johnson, Gregor McLennan, Bill Schwarz and David Sutton (eds.), *Making Histories: Studies in History-writing and Politics* (pp.205-252), Minneapolis: University of Minnesota Press.

Schwartz, Barry, Y. Zerubavel, and B. N. Bartlett (1982) The Social Context of Commemoration: A Study in Collective Memory, *Social Forces,* 61, pp. 374-402.

華語文献

蔡美蓮（2011）「追憶抗日先輩愛国情操 35 天滇緬之路凱旋帰来」『隆雪華堂通訊』8 月号, pp.26-28。

陳共存（1999）「考査滇緬公路報告書」南洋華僑機工抗日回国服務雲南聯誼会編『南僑風』昆明：非売品, pp.13-17。

房漢佳、林韶華（1998）『英雄的故事』Kuching：国際時報。

古来華団探緬南僑機工史実籌委会（2012）『観見之夜』Kulai：非売品。

郭文龍（2012）「為‘南僑機工’建立紀念碑」『聯合早報』2 月 15 日。

何良澤（2006）「南僑魂」陳共存編『南僑魂』昆明：雲南美術出版社, pp.1-106。

柯冰蓉（1999）「南僑機工側写」南洋華僑機工抗日回国服務雲南聯誼会編『南僑風』昆明：非売品, pp.13-17。

林少川（2000）「当代花木蘭」鍾錫金編『南僑機工有唱不完的悲歌』Alor Setar：赤土文叢編輯部, pp.90-99。

林清如（2012）「怡和軒重視南僑機工歴史」『聯合早報』2 月 21 日。

劉宝全（1999）「悠悠歳月風雨同舟」南洋華僑機工抗日回国服務雲南聯誼会編『南僑風』昆明：非売品, pp.32-52。

劉道南（2015）「不譲馬来西亜南僑機工歴史留白」黎亜久、蘆朝基編『馬来亜華僑抗日史料選輯』香港：生活文化基金会出版, pp.144-156。

普朝柱（2000）「在南洋華僑機工抗日紀念碑落成典礼上的講話」鍾錫金編『南僑機工有唱不完的悲歌』Alor Setar：赤土文叢編輯部, pp.111-112。
人民網（1978）「中国共産党第十一届中央委員会第三次全体会議公報」（http://news.xinhuanet.com/ziliao/2005-02/05/content_2550304.htm：2016 年 3 月 29 日最終アクセス）
瀋裕尼（2012）「一段不應被遺忘的歴史」『聯合早報』2 月 15 日。
呉志超（1999）「征戦滇緬公路史詩」南洋華僑機工抗日回国服務雲南聯誼会編『南僑風』昆明：非売品, pp.27-32。
――――（2006）『日本的侵略戦争与我』Kuala Lumpur：隆雪中華大会堂。
徐宏基（2010）「父親開車去延安」南僑機工雲南聯誼会編『赤子功勲』非売品, pp.380-384。
厳春宝（2012）「誰来紀念南僑機工？」『聯合早報』2 月 17 日。
楊發恩（2005）「南僑機工史略調査始末」雲南省帰国華僑聯合会雲南華僑歴史学会編『赤子豊碑―華僑与抗日戦争』非売品, pp.149-158。
――――（2010）「找回歴史的輝煌」南僑機工雲南聯誼会編『赤子功勲』非売品, pp.145-155。
葉鍾鈴（2012）「新加坡建南僑機工紀念碑 夜長夢多」『聯合早報』2 月 26 日。
張雲鵬（2010）「抗戦帰来愛国心 致公忠存成楷模」南僑機工雲南聯誼会編『赤子功勲』非売品, pp.397-409。
鍾錫金（2000）『南僑機工有唱不完的悲歌』Alor Setar：赤土文叢編輯部。
荘明理（1999）「陳嘉庚与華僑機工」南洋華僑機工抗日回国服務雲南聯誼会編『南僑風』昆明：非売品, pp.4-12。
鄒璐（2012）「相信歴史，尊重文化」『聯合早報』2 月 15 日。
――――（2013）『感動的旅程―重走南僑機工滇緬路』Singapore：玲子傳媒私人有限公司。

新聞

『南洋商報』
『聯合早報』

聞き取り調査

郭文龍（Kek Boon Leong）2014 年 8 月 27 日、シンガポールにて。
黄福庭（Wong Fook Tien）2014 年 7 月 16 日、クライにて。
荘耿康（Chuang Keng Kung）2015 年 1 月 17 日、ジョージタウンにて。

（わたなべ・ようすけ　シンガポール国立大学博士課程修了）